編 集 後 記

『歴史学研究センター年報　フランス革命と日本・アジアの近代化』も第3号を迎える。

今年の年報を御一読頂ければおわかりのように、以前のものと比べてかなり厚いものとなっている。これは2004年度と2005年度の国際シンポジウム関連原稿を全てこの号に収録したためである。通常の年報は、該当年度のシンポジウムと公開講座の報告、論文等で構成されるのであるが、2005年は二つのシンポジウムの間隔が短かったこともあって、本書はいっそう盛り沢山な内容となった。他方、紙幅の関係で、昨年度末に開催された公開講座については次号で収録することとなってしまい、その成果をすぐに活字にすることができなかった。御講演頂いた方にお詫びしたい。

この二つのシンポジウムにはアジア・欧米・日本の研究者が集い、それぞれに重要な論点を示され、実り多きシンポジウムとなった。主催者の一人として心より感謝の意を表したい。それとともにシンポジウムを主催した私どもにとって多くの課題も残されたように思われる。これまでの問題提起を受けた私どもがこれをどう消化するのか、その責任は重い。

今年度はこのプロジェクトにとってもう一つ喜ばしいことがあった。歴史学研究センターの助手としてこれまで研究活動を進めてこられたメンバーから、新しい研究の場に旅立ち活躍する機会を得た人が出たこと、それからこれまでの研究成果が博士論文として提出されたことである。来年度以後も、ともにプロジェクトに参加したメンバーから続々と研究成果が生まれることが期待される。

このプロジェクト自体は5年という期間限定のもので（何らかの形で延長する可能性はあるとしても）、もう3年が過ぎようとしている。この区切りに向けてどのような結論を得ることができるか、来年度は重要な年となる。今後とも「フランス革命と日本・アジアの近代化」への一層の御協力をお願いしたい。

田中　正敬